



第0章

「はあ…はあ…はあ…っ！」

ヒデキとの久しぶりのホテルは都心ど真ん中の高級なホテル。

私は元来シャンデリアを吊るすための天吊り金具から降ろした鎖に、ヒデキをつなぐ。

絶対に縄抜け出来ないよう、両手首を鉄パイプで固定した皮ベルトで止めた。

両足も同様。

絶対に外せないように、そして絶対に股間を隠せないように大股を開いた状態で止めておく。

いや、足だけはあえて鉄パイプを通さなかった。

多分後でキ○タマを蹴りあげることになるから。

足元に鉄パイプがあると、足を思いつき振り上げて蹴るのが好きな私にとって、足元のパイプは邪魔なだけ。

私はいつもヒデキのキ○タマを、フリーキックのように蹴り上げる。

正確さは損なわれるかもしれないけど、その方が『私が』気持ち良い。

男として失格。

貴方は女と、ましてやこの私とセックスする価値が無いのだと、教えこむには『私が気持ち良く』。これが絶対だ。

調教と教育は長期戦。

自分が気持ち良くいられることが大事なのだ。

最後に私は、ヒデキの首に革ベルトの首輪を付けて、南京錠を取り付けた。

下を向くとキ○タマがパンパンに絞まっている。

「あらあら、射精は許可しておいたのに随分溜まっているじゃない。

もしかして今日の為に、オナ禁してたの？」

ヒデキがそっと、恥ずかしそうに頷く。

私は、ヒデキの『これから』を思っただけ漏れ笑いをした。

其れがヒデキを欲情させたらしい。

勃起している。

私はヒデキのキ○タマを摘み上げて、指先でピアノを弾くようにコツンコツンと弾いてみせた。

タマがブラブラと揺れて、そのままその振動が亀頭にまで伝わってゆく。

まるでメトロノームのように振れる亀頭。

相変わらずの仮性包茎で、相変わらずドリルのように先が細くなっている。

圧迫し過ぎのオナニーを続け、女を知らないまましていると、こうなるらしい。

私は右手をヒデキの肛門に差し込んだ。

肛門に入れた瞬間、ヒデキのキ○タマが痙攣。

「こ…これは…あ…!!」

「暇つぶし…かな」

「ひあ…あ…!!」

ヒデキは、私の言葉の真意などどうでも良いようで、身を振って悶えている。

女の私にケツマ●コをほじられるのが屈辱で、幸せて、感無量なのだろう。

瞳が潤んで、唇が叱られた小動物のように震えている。

「あああ〜っ！あつ、ひあああ！！！！」

私の、ヒデキよりも長い指をヒデキのケツマ●コの奥の奥まで突っ込んで、中をグリグリとほじくり返す。

前立腺とか、あまり気にしないでとにかく何でもかんでも押し込んでみる感じ。

違和感と痛みしか感じないはずなんだけど、ヒデキは鼻息を荒くして天井を仰いだ。

指に腸液がべっとり。

ヒデキからすれば、聖なる女性器が愛液を垂らすのと同じように、ケツマ●コから腸液を垂らすことはマゾの誇りなのだろうけども、それは女から見れば完全に『男失格』の証明でしか無いことに、本人は気がついてるのだろうか。

私は前立腺のコリコリを人差し指の先に感じたので、其処を押しながら、ヒデキの目の前で口を大きく開いた。

よだれ。よだれにまみれた舌。子供の頃矯正したおかげで綺麗に並んだ白い歯。口を大きく開けたことよって顎になった鼻の穴。

私の身長がかなりヒデキよりも大きいからこそ出来る芸当だ。

私はゆっくと、舌で自分の歯を舐める。

其れを見てヒデキは、勃起したチ●ポをピクピクと跳ねさせた。

もう少し…。

もう少しだけヒデキの身長が高かったら、チ●ポの先っちょぐらいは私のマ●コに触れることが出来ただろう。

もちろん其れを私は許さないし、私たちの身長差があれば、其れは出来ない。

今だってそうだ。見なくても分かる。

ヒデキの尿道からはカウパー液がタラタラと溢れそうになっていて、どんなに私のマ●コが愛液を分泌しなくても、つまりは私に全くその気がなくても、『スムーズに膣内射精出来るようカウパー液でも何でもこちらで準備いたします』と、チ○コがアピールしている。

報われないと分かっているのに、貢ぎ続ける童貞と同じで…、哀れ。

でも私が、ヒデキに私のマ●コに挿入させるなんてことは、多分一生無いのだろう。

哀れだと思っし、情けない男だと思っけど、…いや、だからこそ絶対に私は『させない』。

私のココに挿入を許すのは、その価値がある男だけだ。

「ひいっ！イクうううっ！」

「…は？」

私は無意識のうちに、指でヒデキの前立腺押ししたり撫でたり、擦ったりを繰り返していたらしい。

ヒデキの目を見れば分かる。

脳に快感が溢れ、今日のためにオナ禁して貯めてきたマゾ汁が破水しそうなのだ。

私は一気に、力強く、ほんの少しの快樂も伴わぬように力を込めて指を引き抜いた。

「ひぐっ！ひふううっ。…あ…ああ」

ヒデキは射精出来ると思っていたのだろう。

悲痛な声がなんとも侘しい。

私はニツコリと作り笑顔をヒデキの前で作ってから、彼の側を離れた。

当然、ヒデキは射精していない。

今耳元に息を吹きかけたらそれだけで射精してしまいそうな顔をしているが、私にはそんなこと関係無い。

ベッドの上を四つん這いで歩いて、カーテンを開く。

マ●コもアナルも、そしてヒデキの大好きな私のお尻も丸見えの状態。

ヒデキの視線がその辺りに釘付けなことは分かっている。

でも私が主張しなかったのは其処じゃない。

窓の外には、闇とショーウィンドウの中の宝石みたいに輝く街。

私の大好きな東京。

人間が資本主義というルールで戦う街。

ここで勝てる男に…、私は挿入を許すのだ。

第1章

「イかせてええ！イかせてくださいいいい！」

「ダメに決まってるじゃない。」

「今日からヒデキは射精をするのに、許可がいるの」

「今までだってええ！今までだってええ！」

「そうね。今までは私の許可が必要だったわね。」

でも今日から私だけじゃダメなの。

貴賓がいらっしやるわ。

その御方にも許可を頂きなさい。

そうしたら、射精を許してあげる」

「ひいひい！今っ！今射精させてくださいいいい！」

「ダ〜メツ（笑）」

ヒデキがいくら足を内股にして、必死で股間を擦ろうとしても無駄。

絶対に自分ではいじれないように拘束してあるのだから。

だから空気以外の摩擦は、ヒデキの仮性包茎にはもたらされない。

ギンギンに勃起していて、今すぐにも射精したくてたまらない。

そのままの状態で御主人様をお迎えしなければならぬのだ。

私は御主人様の好みである血のように赤いロープを入念にチェックする。

万が一、汚れやホコリがついていたら御主人様のご気分を害するからだ。

次に、しっかりとベッドシートをチェック。

きつと今夜は御主人様と此処で眠ることになる。

だから何か粗相があつてはいけない。

お風呂。此処も重要だ。

御主人様は綺麗好きだし、お風呂をとっても好む。

気分よく入浴頂けるようにチェックしておかなければならない。

そして最後に私自身。

マ●コは綺麗か。匂いはないか。香水などで誤魔化さずありのまま…、それでいて無臭か？歯は？エチケットは十分？鼻の穴は？汚物なんてついてないわよね？肌の調子は？化粧は？髪は？一度入浴してから丹念に梳いておいたけど問題ない？お尻は？滅茶苦茶にしなくなるような、綺麗なお尻？アナルまで？本当に？

姿見で細かくチェックしてから、ドアの前、ヒデキがギリギリ私を見れるところで私は全裸のまま綺麗に三指をつけて、床におでこをつける。

もちろん両足は親指を重ねて、マ●コを上に乗せてある。

そしてあの方：私の御主人様であり、私たち雌奴隷を集めたハーレムの王であり、『男』のあるべき具現人である足立俊一様がいらっしやった。

「やあ、こんばんは」

「御主人様。お待ちしております。本日は雌奴隷ミホのご調教、宜しくお願い致します」
俊一様は、ドアを開けたままで私に頭を上げるように命令すると、全裸のまま正座する私の太ももを革靴で踏んで下さった。

私は其れが『革靴を脱がせてくれる？』という無言の命令だと理解した。

ホテルだから脱ぐ必要は無いけども、これからセックスしようというのだ。靴は邪魔に
しかならない。

幸い高級ホテルなだけあって、しっかりとしたサンダルがある。

私は正座したまま太ももの上の、俊一様の革靴の紐を解く。

両方の靴を脱がせて丁寧に並べたら、今度は御神足にスリッパを履かさせて頂いた。

俊一様はその間、終始鼻歌を歌っていらした。

少し古い歌だけど私はそれがなつかしくて、得も言われぬ望郷の念に囚われてしまった。

スリッパを履かせ終わったら、そのまま腰を低くしたまま立ち上がり、間違っても御主人様より視線が高くなならないように十分に腰を低くして俊一様を奥にご案内した。

俊一様は私の後ろを歩きながら、裸の私をクスクスと笑いながら、無防備な私のお尻に
ぺちぺちと手を当てて音を楽しむ。

「緊張してるね。

まずはお風呂だ。

おっと…その前に…ふふふ」

「はい。御主人様。こちらが夫のヒデキにございます」

「…え？え？えっ！？」

混乱するヒデキを無視して私は、ヒデキの他人には知られたくないであろうことまで含
めて、包み隠さず俊一様にご紹介した。

「石川ヒデキ。

28歳。オス。性癖はマゾ。

チンコのサイズは勃起時で11センチ。御主人様の半分以下です。

ご覧の通り、限りなく真性に近い仮性包茎。

職業は、派遣社員。

現在、御主人様が経営なさってる会社の中の一つ『イリーガル・リトル』にて、車工場
で使う制服の営業を担当しております。

年収250万。

昨年までアメリカにて衣服の製造会社を経営しておりましたが、経営失敗。妻である私
にまで700万円の借金があります。銀行からも借入れがあり、手取りは全額そちらの

返済に回してあります」

「へく。じゃあ生活はどうしてるの？」

「生活費は全て私が面倒をしています」

「ふくん」

俊一様はいつもと変わらぬ笑顔のまま、鎖に繋がれたヒデキを見る。

「あ…あの…！」

「ヒデキ。さっきも言ったでしょ？」

この方が私たちの御主人様よ。

今日から貴方は射精の許可を俊一様からも頂きなさい。

許可無しでは射精しちゃダメ。

分かったわね？」

「え…いや…あの…！」

「ふむ。」

えっと…ヒデキ…だっけ？

キミは奴隷みたいだし、奥さんのミホにも相当な負い目が有るみたいだから、ミホの御主人様であるボクも呼び捨てで呼ぶよ？

ヒデキ…とりあえず今日は射精を許可しないから。

そのままそこで繋がれたまま、ボクがミホを犯すところを見てな？

あとで、ミホがどれくらいボクを崇拜してるかを反省文として原稿用紙50枚で提出させるから、今日は事細かく全てを観察するように。

いいね？」

「うぐ…っ！いやあの…っ！」

ヒデキの頬を叩きたい衝動に駆られる。なんで即座に、従順に返事をしないのよ。

私の御主人様だからヒデキが最大限以上の服従心と敬意を示すのは当然なのに…。

私はぐっと拳を握りこんで何とかこらえる。そして感情の荒ぶりを御主人様に悟られて、嫌な思いをさせないためにも。

「ヒデキ。一応貴方にも紹介してあげるわ。

こちら足立俊一様。

イリーガルホールディングスの創設者で、会長兼社長。

お年は、24よ。

貴方が勤めてる『イリーガル・リトル』も俊一様の会社の内の一つ。

私が務めている『イリーガル・ホールディングス』もその内の一つよ。

年収は手取りで、…まあ、10億20億じゃきかないわね。

文字通り雲の上の、天上人よ」

「…………え」

ヒデキの勃起していたチ●ポがグニヤリと頭を垂れ、何とか零れずにいたカウパー液が

一筋地面に垂れてゆく。

その姿はまるで、ヒデキのマゾチ●ポの方がヒデキよりちゃんと上下関係をわきまえて
いるように…、少なくとも私にはそう見えた。

「ヒデキ、言っただけじゃなかったけど私…、この御方の、俊一様の雌奴隷として、ハーレム入り
させて頂いてるの。ことになったの。私の他にも俊一様はたくさん『女』を飼っていらっ
しゃるのよ。」

ハーレムするにあたって、貴方のことも『役立たずのどうしようもない夫がいる』って、
きちんとお話ししてあるわ。

それでね。

私が絶対にヒデキに身体を許さないなら、このまま婚姻関係を続けて良いとお許しを頂
いたの。

もちろん細かく条件が決まっているわ。

- ・キスはもちろん手をつなぐ等、許可無く私に触れることは禁止。
 - ・当然、ヒデキから私に話しかける事は禁止。
 - ・今日からヒデキが人間として口にして良い言葉は、「分かりました」のみ！
 - ・貞操帯の鍵を2重にして、御主人様と私でそれぞれの鍵を管理。
 - ・御主人様の許可無く私の裸を見るのは禁止。
- 見て良いのは、普段着・仕事着まで。
下着姿も禁止で私が身に付ける下着そのものを見ることも禁止。

以上を守れるなら、離婚届にサインして御主人様に預かって頂きなさい。
市役所に提出したらそのまま、受理されるように実印を押しておくのよ。

明日、会社で御主人様に提出すること。

其れが終わって初めて、ヒデキを御主人様と私の共有奴隷として認めてあげるわ。
分かったわね？」

「いや…そんな…だって僕たち夫婦だし…」

「やめてよ。そんな言い方。」

でもそうね。この話はヒデキにもメリットがいくつかわるのよ。

一つは、借金のこと。

私に700万、銀行にはいくら借金があるの？

1000万？2000万かしら？

貴方が従順な奴隷にいるなら、御主人様が肩代わりしてくださるかもよ？

御主人様にとって、3000万なんて、端金だもの。

2つ目のメリットは、私と離婚せずに済むわ。

普通、ハーレムの中の女は全員御主人様の息のかかった男と結婚し直すの。

いわゆる偽装結婚ね。

もちろん相手の男に身体を許すなんてことはないわ。

下着姿も見せないし。

これは、グループ会社全体の人事を握っておくためのなの。

ハーレムの女の子と、その女の子と結婚した男たちは全員離婚届にサインをして、御主人様に預かって頂いているわ。

私もハーレム入りして、どこかの汚い中年オヤジと再婚するつもりでいたんだけど、御主人様の気まぐれで、私だけはヒデキとこのまま婚姻関係を維持しても良いことになったの。

『離婚じゃなくて済む』

ヒデキにとってこれは重要なんでしょう？

私以外じゃ、こんなマゾ…結婚してくれないもんね？」

「あ…あ…それじゃ…」

「ただうっしっ！」

もしも御主人様のご気分が変わられたり、ヒデキが御主人様の機嫌を損ねたりしたら、即時離婚よ。

さっき言った『条件』だって、他の男たちも全員守ってる。

それほど貴方にとって『酷い』条件だとは思わないけど？

っていうかむしろかなり優遇されているわね」

「あゝ、ヒデキ。

もう一個、ミホの言葉に追加して言うかね。

今キミがいる、イリーガル・リトルは小さい会社だし、ミホといっしょに働けるようにイリーガル・ホールディングス本社に転勤にしてあげるよ。もちろん派遣ではなく直雇用。

キミが泣いて喜ぶような待遇を保証するよ。

もちろん、明日の朝までに離婚届を提出してもらおうけど…ね？」

「…泣いて…喜ぶ…」

「あら？分からない？

これから会社で毎日私や御主人様に会うのよ？

しかも上司と部下の関係。

私たちに会うたびに、今日のことを思い出して情けなしい気分になるの。

そういう気分のままお仕事して、帰ったら一人寂しく私が抱かれるところを想像しながら、股間の貞操帯を見て、フル勃起して射精するあの快感を……諦めるの」

「嬉しいだろ？」

御主人様のお言葉に、ヒデキのチ●ポがゆっくりと、でも確実に上向きに膨れ上がってゆく。

「…おチ●ポが先に返事しちゃったわね（笑）」

第2章

「ほら、どうしたの。もっと腰を突き出しなよ。」

ボクの子●ポが刺さっている間に愛液をたくさん出さないと、赤ちゃん孕め無いよ？」

「んっ！んぐっ！あっ♥あっ♥あっ♥」

真っ赤なロープが私の身体に食い込む。

引き締められた私の身体が快樂の波に飲まれて重力に負けると、御主人様は後ろ手に縛り上げたロープの先を持って私を吊る。

吊られると、そのまま子宮が御主人様のチ●ポを『お迎え』してしまうのだ。

御主人様は腰を動かしてくださらず、私を釣り上げることで、私のマ●コの方を動かす。

こうして私は、私の意志と関係なく、御主人様のチ●ポを包み込んで刺激するオナホとなるのだ。

其処に私のできることなど微塵もない。

あつてはならないし、全ては御主人様の思うがまま、気持ち良いままにあるべきなのだ。

其れが奴隷であり道具であり、仕える者のあるべき姿だと思う。

御主人様にとって満足できる間だけは、お仕えすることが許される。

其れが私の立場だ。

愛液にまみれ、痙攣にも似た感覚がおマ●コの中を激しく駆け巡る中、もう何回目かわからない絶頂を迎える。

御主人様の精液がマ●コの子ダにまで溢れかえっていて、私の知らぬ所で大切な子種が零れてしまっているのでは…と、激しく不安感を煽る。

全部、全部。全部の精液をマ●コの中に収めたままでいたい。

子宮を満たし、膣を満たし、私の生殖器の空洞を御主人様の精液で満たして欲しい。

絶頂した瞬間、また身体が重力に負けそうに傾く。

しかし、私が重力に負けかけた瞬間、ロープが私を引き上げ、御主人様のチ●ポがまだ私の内部に有ることを教えてくれた。

まだご奉仕は終わっていない。

自分だけ満足して終わる…。そんなわけにはいかないのだ。

「もう休憩？早いよね。」

まだまだ夜は長いし、元気を分けてあげようか。

それっ！

御主人様は私を吊り上げて子宮に『お迎え』させると同時に、今日初めて私のお尻に、ヒデキの大好きな私のお尻に、腰を打ち付けてくださった。

「ふあふっ！」

鍛えあげられ、女をよがらせ続けた筋肉。硬くて熱くて、圧倒的な力の差を体感させてくれる御主人様の腰。



私のお尻は全細胞が御主人様の腰に対して、白旗を上げ、敗北を認め、服従を誓い、ありとあらゆる陵辱を受け入れる。

その証拠がこの「パン」という厭らしい音だ。

音が鳴っているのは御主人様の腰ではない。

私のお尻の肉が、無抵抗に、与えられた衝撃を従順に受け入れて鳴ってしまったのだ。

ヒデキのようなマゾの身体では、一生涯感させることのできない極上の責め。

ありとあらゆる女が受け入れてくたて仕方がない、洗練された腰使い。

「ふふ。お尻を鳴らされると、背骨から蕩けてしまうね、ミホは」

今しがたイッたばかりだというのに、またマ●コがヒクヒクと疼きだし、御主人様のチ

●ポを包み込んで擦り上げてしまう。

今日はもう：何回イッたのか、理性でも把握できていない。

そして、私は日付が変わった2時間半後まで、ベッドで失神していた。

私が目を開けた時、御主人様はお風呂でシャワーを浴びていらした。

ヒデキは俯いたまま、何か独り言を言っている。

私はそっと手のひらをマ●コのヒダに這わせてみる。

ねっとりと何かが指に付着した。

そっと鼻先に手を掲げ、匂いを嗅ぐ。

ああ、間違いない。

御主人様の精液と私の愛液の香りだ。

「あ、おはよ。」

『今回は』随分早いお目覚めだね。

この間は、朝までグッスリだったけど。

まあ起きてくれて助かるよ。

ヒデキの事で、色々とお話しないといけないしね」

「…はい」

バスローブに身を包んだ御主人様が椅子に腰掛けたので、私は慌ててロビーにアイスを持ってくるよう内線をかける。

御主人様のお好きなバナライسد。

そしてすぐに御主人様のお身体が冷えないように、部屋の温度を2度上げる。

御主人様は椅子に腰掛けたまま、ヒデキを見ていらした。

正確には、ヒデキの股間。チ●ポからしとどり落ちる精液を見ていらっしやるのだ。

御主人様が私を手招きしてくださったので、私は御神足の許に正座する。

「ボクさ、射精するなと命令しておいたはずだよね？」

「はい。御主人様」

「キミの旦那さん、ちょっと情け無さ過ぎるんじゃないの？」

「も…申し訳ありません…」

「セックス中、ずくつと後ろでキャンキャン吠えてたよ？」

「ミホはボクのチ●ポに夢中だったから知らないだろうけど…」

「そっ…そうでしたか。あの…その…申し訳…ありません」

「そういうわけだから、ヒデキっつ。」

「キミ、鍛え直さないとダメみたいだし、お仕置きと矯正器具から始めよっか？」

「…う…うう」

私はいつの間にか御主人様の足元で、土下座しながら何度も何度もお詫びの言葉を吐き続けていた。

そしてつむじの辺りを御主人様に、軽く蹴られて私は立ち上がり、ヒデキの後ろに立つ。

「やめて…」とつぶやくヒデキの髪を鷲掴みにして、夫の耳元で怒鳴るように言った。

「御主人様に『射精は無し』と言われたでしょう？」

ガンっ！

「ぎりやああああああっ！」

ヒデキがキ〇タマを蹴り上げられるたびに身体を揺すって痛がるので、肝心のキ〇タマが左右に揺れて的確に鞏丸を潰せない。

でも今はまだ3割〜5割程度の力だから、それほど問題じゃないと思う。

むしろ問題は…ここから。

「そろそろ本気で蹴りあげたら？」

「は〜いっ♥」

「はあ…はあ…………????」

鼻水を垂らし、涙をこぼし、顔は紅潮し、足は内股よりのまま痙攣し、爪先立ちで激しく呼吸をするヒデキ。

私はヒデキの呼吸が整うほんの少し前を狙って、足を振り上げ……。

「…ひっ!!」

…寸止め。

クスクスと漏れ笑いをする御主人様の視線を少しだけ気にしながら、ヒデキの耳元で囁く。

「あれ〜？」

キ〇タマキックの時は、もっと足を開かないとダメでしょ〜？

もっと足を開いて。

膝を外側に向けるの。

もっと！

そ。

言われなくてもそのくらい当然。

あれ？

今何回蹴ったんだっけ〜？

あ、もしかしたらまだ私、蹴ってなかったっけ（笑）」

「ま…待って！もう3回！3回蹴りまし…ふあが！」

ガンっ！

「ひぐううううううう!!!!」

「7割。だいぶエンジンがかかってきたわよ。

やっぱ足の甲でキ〇タマが弾けそうになるのがこの辺りかな。

とメーブルシロップがオブションとして小瓶に詰められていた。

「以上でよろしいでしょうか？」

「うん。ありがとう」

「いえ、それでは失礼致します」

裸で少し汗ばんだ私は、何か言われるかと少しスタッフさんから距離をとっていたのだけれど、御主人様は一切うるたえること無く幾つか言葉のやりとりをしてスタッフさんを下がらせた。

結果論から言うと、スタッフさんはどちらかと言うと、いわゆる『こちら側』の人間だったようで、部屋を出る際ヒデキを見て「ぶっ」と笑った。

私はほっと一息つく。

何か言われるのではないか不安で不安で仕方がなかったのだ。

ヒデキの躰けが終われば、あのベッドで御主人様と二人だけの時間。

それだけは逃したくなかった。

「入ってきた時の物腰で分かるでしょ？」

「え？」

御主人様の指摘に私は恐縮した。

「そういうものでしょうか？」

「ん。」

お、旨いかも。

これ食い終わるまでに、そっちも終わらせてね。

あと70発残ってるでしょ？」

「はい。かしこまりました」

私はずんずん大股で歩いて、ヒデキの後ろに陣取る。

御主人様のお言葉に従い、先程よりも多く蹴るということになったので、少し気を張っているのだ。ヒデキは回数が増えたということに気がついてさえないようだけど…。

「そういうわけだから、全力で行くわよ。」

ヒデキも膝を大きく開いて、痛みを受け入れなさい。

貴方のキ〇タマは射精する価値が無いの。

体で覚えさせてあげてるんだから、ヒデキが協力するのは当然でしょ？」

「う…うう…」

「返事は？」

「わ…分かり………ました」

「おりゃあああつ！」

ドズウ！

「ふぐうおっ！ふぐうおっおおっ！！！」
キ○タマ蹴り上げられて、意識を失う直前のM男って皆、同じ。
焦りと恐怖が表情にありありと浮かび、絶望の顔に変わって黒目がグリングリン動く。
目を回しているのか、そのまま膝の力が抜けて崩れ落ちる。
崩れ落ちる時に、腰が下がるタイミングも一緒。
その瞬間を狙って私は、思いつ切り全力で…蹴りあげる！！！」

グチユウ！

「ぼええっ！ふぐうっ！ぼえっ！」

この瞬間だけは100%、睾丸を蹴り上げられる。

なぜかいつも確実に、正確に、絶対に決まる。

まるでヒデキのキ○タマの方が私の足に吸い寄せられるかのごとく、絶対に、渾身の一撃が決まる。

私はヒデキの髪を掴んでいる手を放した。

ヒデキの髪の毛がひらひらと空中を舞う。

そして鎖が独特の金属音を鳴らして、ヒデキの全体重を支える。

私は足の甲の感覚で確実に認識できていたけれども、一応目視して確認する。

「御主人様、ヒデキの睾丸。」

左だけですが、潰れたようです。

左だけ、キ○タマ袋の中でドロドロになっています」

「そう。」

じゃあ、ヒデキが寝ている間に、アレ…嵌めちゃおっか？」

「はい、かしこまりました」

鞆の中の、この日のために用意しておいた男性用貞操帯。

特製で、絶対に抜けないよう、職人が手作りしたものだ。

私はそれを気絶したままのヒデキに嵌めてゆく。

そして最後の鍵。

当然鍵はディンプルキーで、貞操帯本体はボラゾンという金属で出来ている。（※ボラゾンはダイアモンドとほぼ同じ硬度を誇る合金）だからヒデキが自分で外すことは絶対無理。

しかも鍵が二重にかけられるようになってる。

まずは、私が管理する方の鍵だけはしっかりとかけておく。

そして御主人様が管理する方の鍵は……………。

「目が覚めた？」

ヒデキが意識を取り戻したことに、最初に気がついたのは御主人様だった。

私はその時、お掃除フェラに夢中で全く気が付かなかったが…。

ヒデキはすぐに股間の鍵に気がついたようで、目を真ん丸にして自分の股間を見つめている。

「それね。貞操帯。今日から嵌めたままにしましょうから。

御主人様と私の許可無しでは外さないように。

いいわね？」

「え…あ…う…」

「其れを嵌めたままに出来るというなら、ご褒美を上げるわ。

御主人様に出し頂いた私のマ●コの中、吸い取らせてあげる。

もちろん飲んでもらうわよ？」

「えっ!?!」

やっぱりヒデキは食いついてきた。

私たちは結婚してからまだ半年も経っていないけど、婚前も含めてヒデキが私のマ●コに触れたのは、たったの1回しかない。

それも初めてのホテルで、顔面騎乗で窒息失神させた時だけ。

ヒデキにとって此処は、『聖域』なのだ。

「や…やります。したいです!」

「したいって、生ハメじゃないわよ？」

クンニよ、クンニ。

吸い出しクンニ」

「は…はいっ!」

わっかりやすい反応に御主人様はケタケタと笑って、私にだけ聞こえるよう、私の耳元で、「童貞ってセックスしても一生童貞なんだね」。

「はい♥仰るとおりです。

まあ、私は本番を許していないので、ある意味身体は童貞のままですけども…。(笑)」

「クスクス、非道いなあミホは。

じゃあ、とりあえずもう一個鍵をかけてもらおっか？」

「はい、かしこまりました。

ヒデキっ!

其処にもう一個鍵があるでしょう？

鎖を外してあげるから、その鍵を自分の貞操帯にかけなさい。

そして鍵を御主人様に預けるの。

『自分で』チ●ポに鍵をかけて、妻を雌奴隷にしてくださいだった『御主人様』である俊一

様に『管理』していただくのよ。

もちろん土下座でお願いしてもらおうわ。

きちんとご挨拶できるのなら、吸い出しクンニを許可します。

いいわね？」

「あ……鍵を自分で、かけて……ご……御主人様に……」

「そ。当たり前でしょ？」

これからは御主人様にもヒデキのおチ●ポが勃起しないように。

ましてや射精なんか絶対にできないように管理してもらうんだから」

「あゝ、いやいや。」

ミホ。

別にボクは、ヒデキの射精まで管理するつもりはないよ？

射精、結構。

おおいに下さい。

ただし貞操帯を嵌めたままだね。

さつきミホに言わせた奴隷の心得だって、オナニーも射精も、女性とのセックスだって禁止してないよ。

もちろん貞操帯は外さないけども。

貞操帯を外さずに射精できるようになったら、ぜひオナニーショーを開いてもらうよ。

例えば、オナホだって買って良い。

貞操帯の上からオナホで一生涯命抜くと良いさ。

もしもそれで射精出来るのなら………ね」

ヒデキの顔が絶望に染まる。

其れを見て私は、御主人様の胸に飛び込んでぎゅっと絶対君主を抱きしめていた。

とてつもなく不敬なことだけでも、気がついたらそうしていた。

「大好きです、御主人様♥」

私はそのまま仁王立ちする御主人様の股間まで顔を降ろして、お掃除フェラの続き。

夢中でしゃぶったわ。

そして私の後ろでヒデキがブツブツとつぶやく。

「借金……チャラ……、本社への転勤……」

貞操帯……、鍵。

ミホ様の下着はもう見れない。

でも、此処で吸い出しておかないと本当に孕むかも…

でも、オナニーは許してもらってるし……」

バカね。貞操帯の上からじゃ射精なんかムリよ。

ヘルメットの上から頭撫でたって、直でされるのとはぜんぜん違うでしょ？

「んっちゅ。くちゅ、レロ」

「あ、ミホ。」

ヒデキがなにか言いたげだよ。

聞いてあげて」

「何？…ヒデキ」

「あ！…あの！

やり…やります！

クンニ！

嵌めます！

貞操帯！

だから…」

「分かったわよ。」

鎖を外してあげる。

奴隷らしく足立俊一様にご挨拶するのよ？」

私はわざと御主人様のフルネームを言う。

ご挨拶の時に間違えないようにだ。

でも其れはヒデキのためじゃない。

私が『気の利く女だ』と御主人様にもっと気に入って頂くため。

私はヒデキをつなぐ鎖を外しながら

「ようこそ」

そうつぶやいた。

鎖を外してやると、ヒデキはすぐにその場で倒れこんだ。

アナル丸見えて横たわるヒデキの髪を思い切り掴んで、アイフォンでヒデキを動画録画している御主人様の足元まで引つ張る。

そのまま無理やりヒデキの顔を地面に押し付けて、耳元で

「三指つきなさいよ。」

足は揃えて重ねなさい。

そう。

それじゃ、私の言うとおりに言うのよ」

「あ…う…」

ヒデキは録画する御主人様のアイフォンに気がついたようで、凄く縮こまって動揺している。

だから私は気合入れの代わりにヒデキのお尻に一発爪先で蹴りを入れた。

「おぐっ！」

「良い？間違えずに言いなさい。」

『私は妻を寝取られて射精してしまう、寝取られマゾです。』

妻が御主人様のハーレムに置いて頂くことに感謝し、本日より御主人様である足立俊一様に絶対服従致します。

服従の証として、私の役立たずマゾチ●ポを封印した貞操帯の鍵を御主人様にも所有して頂き、私自身と貞操帯の鍵、妻を御主人様に捧げます。

これらは御主人様の所有物であり、

廃棄処分・譲渡など一切の権利を『足立俊一』様に一任致します。

どうかこれからも妻を御主人様にとって『都合の良いオナホ』としてお使いくださいませよう、心からお願ひ申し上げます』

ヒデキは決してスラスラではなかったけれども、何度かつかえて私にお尻を蹴り上げられたけれども…それでもその言葉を言ったわ。

そしてヒデキは震える手で自分のチ●ポに『鍵』をかける。

鍵をむしりとりつても良かったけれども、私はあえて何も手を出さなかった。

ヒデキに、自分の手で御主人様に鍵を渡させたから。

ヒデキはずっと…本当にずっと…鍵を出すか否か悩んでいたようで手がガクガク震えっぱなしだったけど、それでも鍵を…まるで捧げるように両手で持って御主人様に手渡した。

御主人様は録画ストップボタンを押して、動画をクラウドに転送する。

これでもうあの動画はヒデキの力だけでは一生消せない。

そうしてからヒデキの鍵を受け取って、胸ポケットに仕舞われた。

「御主人様♡」

御主人様は抱きついた私の頭を撫でて、少しだけ優しく微笑んでくださる。

「ん。」

ミホは身体が冷えただろうから、お風呂に入っておいで。

ヒデキはそのままホテルの廊下に出て。

原稿用紙がドアのところにあるから、それに今日のことを書いておくと良いよ。

明日の朝、提出しないとイケないだろ？

『ミホがどれほど御主人様を崇拜しているかの反省文50枚』。

ちゃんと起承転結を踏まえて、誤字脱字の無いようにね。

50枚書き終わったら、帰って良いよ。

離婚届を役所でもらって、サインをしないとイケないだろうし。

ああ、これからボクはミホに中出しするから、それを思っただのオナニーと射精は許可するよ。

貞操帯は外さないけど（笑）」

「あ…でも…ご褒美は…」

「もちろん、ナシだよ。」

これからボクがチ●ポぶっ刺すマ●コに、汚い口とか付けられても…ねえ？」

私はお風呂に駆け込んですぐにシャワーの栓をひねる。

ヒデキがその後どうやって帰ったかとか、反省文を本当に廊下で書いていたのかとかは知らない。

だって御主人様に出しして頂いていたから。

御主人様以外のことなんかどうでも良い。